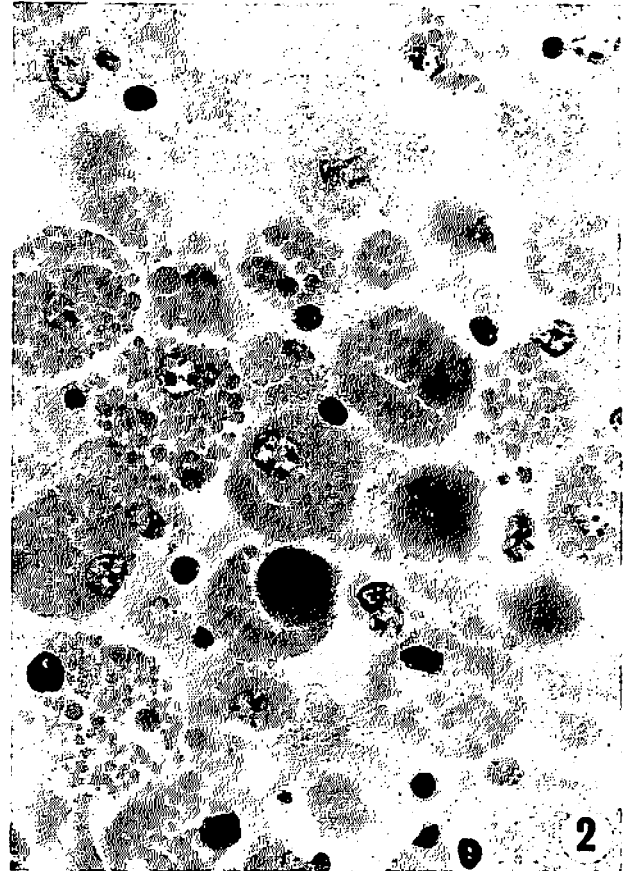
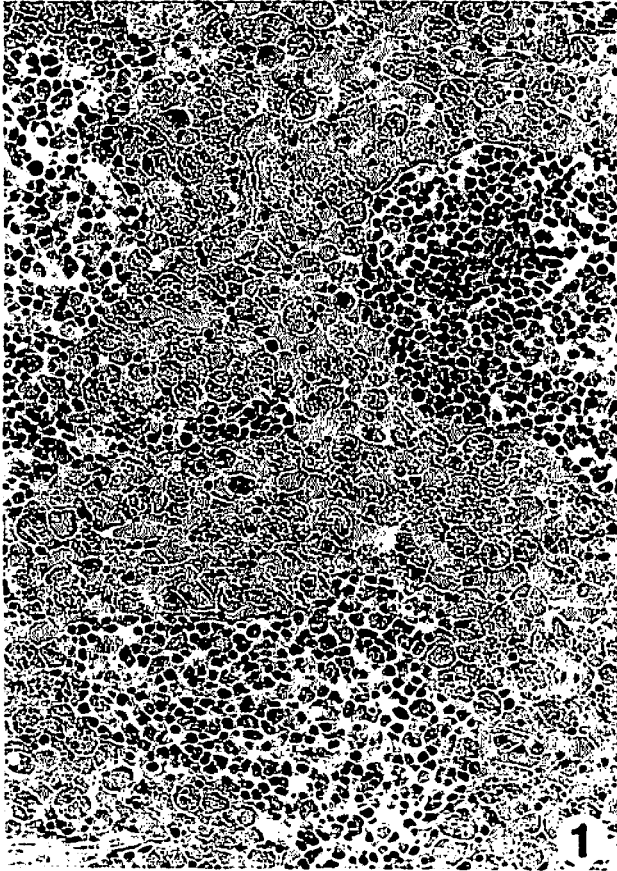


山羊のリンパ節

麻布大学獣医学部病理学教室・横浜市食肉衛検出題 第27回獣医病理研修会標本No.470



動物：山羊，ザーネン種，雌，2歳。

肉眼所見：全身皮膚に、亀甲模様のような丘状隆起部が多発。皮膚の肥厚や皮下にリンパ節様の結節の形成が見られた。全身のリンパ節は、著しく腫脹し、断面は髓様、灰白色。大網には、直径約0.5×0.5cmの灰白色の結節が散在。肺は、退縮不全で、胸膜の肥厚と肺炎病巣を認めた。肝臓は、腫大し、肝小葉が明視され、包膜は不規則に肥厚していた。脾臓も腫大していた。

組織所見：全身のリンパ節と諸臓器、とくに肝臓と肺に好酸性の滴状物を含有する大型、円形の細胞の増殖が見られた。この特徴ある細胞は、リンパ節ではリンパ洞内に充満し (Fig. 1, HE染色, ×370)、一部髓索内にも浸潤していた。肝、肺では包膜、小葉間結合織、気管支周囲に存在し、その他、小腸の粘膜固有層、心、腎、脾にも認められた。この細胞は円形または類円形の淡明な核をもち、核仁の明瞭なものが多かったが、核の変形、濃縮しているものも認められた。細胞内の球形滴状物は、核よりも大きく細胞内に充満するほどのものから微細顆粒状のものまで様々で (Fig. 2, HE染色, ×1,480)、なかには空胞状を呈するものもみられた。これらは、PAS反応

強陽性、メタクロマジー及びペルオキシダーゼ反応陰性、PTAH染色では濃青色～茶色、メチルグリーンピロニン染色では赤色を呈した。また、直接蛍光抗体法によってIgGの局在を調べたところ、この滴状物は、強い蛍光を発したが、この蛍光はblocking testにおいても消失しなかった。

なお、山羊の腸管や胆管によく見られる光輝細胞は、一般染色性においてこの細胞と類似していたが、この蛍光の有無によって明確に区別できた。

また、明瞭な核分裂像は、ほとんど認められなかった。電顕的には、細胞内滴状物の電子密度は様々で、1層の膜をもち、一部にリボゾーム様の粒子の付着が見られた。

好酸性顆粒状～滴状物を有する細胞または有する可能性のある細胞として、好酸球、ラッセル小体をもつ形質細胞、顆粒細胞腫細胞、光輝細胞、Globule leucocyteと肥満細胞が考えられ、本例に見られた細胞と比較検討したが、完全に一致するものではなく、この細胞の起源は確定できなかったが、この特異な細胞は、全身性に広範に認められること、明らかな組織破壊もないことなどから、一応、「硝子体含有細胞の全身増殖症」と診断した。